

第四回

井上靖記念文化賞

## 第四回 井上靖記念文化賞

みやもと てる  
**宮本輝**

作家

### ●贈賞理由

「泥の河」以来、戦後の市井の人々の姿と情感を  
描き尽くした希代の物語作家



### 【略歴】

- 1947年 兵庫県神戸市生まれ
- 1970年 追手門学院大学文学部卒業
- サンケイ広告社入社、コピーライターとして企画制作部に配属
- 1975年 サンケイ広告社を退社
- 1977年 『泥の河』で第十三回太宰治賞
- 1978年 『螢川』で第七十八回芥川龍之介賞
- 1981年 映画『泥の河』（小栗康平監督）がモスクワ国際映画祭銀賞
- 1982年 『流転の海』月刊誌「海燕」（福武書店）に連載開始
- 1987年 『優駿』で第二十一回吉川英治文学賞
- 2004年 『約束の冬』で第五十四回芸術選奨文部科学大臣賞
- 2009年 『骸骨ビルの庭』で第十三回司馬遼太郎賞
- 2010年 紫綬褒章
- 2018年 三十七年の時を経て『流転の海』シリーズ全九巻が完成
- 2019年 『流転の海』全九巻で第六十回毎日芸術賞
- 2020年 旭日小綬章

### （主な著書）

『泥の河』『螢川』『星々の悲しみ』『道頓堀川』『錦織』『青が散る』『流転の海』『葡萄と郷愁』『優駿』『約束の冬』『にぎやかな天地』『骸骨ビルの庭』『水のかたち』『田園発 港行き自転車』など

## 原点に立つ

私は昭和二十二年に生まれました。戦後の貧しさはつづいていて、物心ついたころから家のなかで遊んでいたという記憶はほとんどありません。少々の雨が降ろうとも、外で走り廻って遊んでいました。テレビも高価で手が出ず、電子ゲーム機器などが登場してくることさえ想像もできなかった時代です。

家で楽しめる遊び道具というものが少なかったお陰で、体が弱くてすぐに熱を出す私は本を読む少年になっていきました。

中学生になると、私が本好きであることを知った近所のおじさんが一冊の小説を貸してくれました。井上靖先生の名作「あすなる物語」でした。

そのころ、父の商売の失敗を発端として、我が家は暗い時代を迎えていました。両親の不和と借金取りに追われる日々からの逃避だったのでしょうか。私は何かから隠れるようにして、押し入れのなかで「あすなる物語」を読みふけりました。おとなの読む小説に初めて接したのです。読み終わって、小説とはなんとすばらしいものかと思いました。

二十七歳のとき、精神的な病気に苦しんでいた私は、不意に小説を書きたくなりました。心の奥底に眠っていた「あすなる物語」が静かに動きだして、私の背を押したのだといまは確信できます。

そんな私が井上靖記念文化賞を受賞させていただけるなどというのは、まったく夢のようだとしか言い様がありません。私は再び原点に立つことができます。選考委員のみなさまに心からお礼申し上げます。

## 受賞の言葉

# 宮本 輝

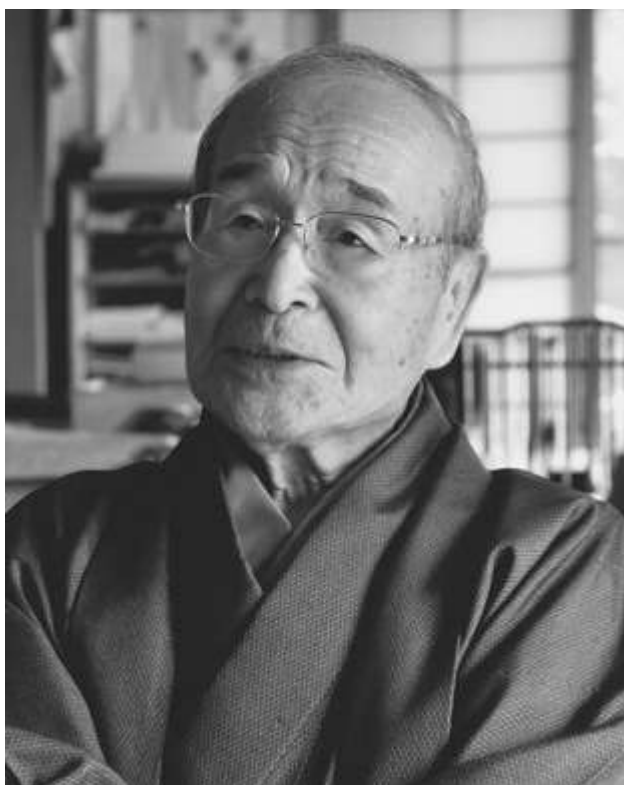
第四回 井上靖記念文化賞 特別賞

おかの  
**岡野**  
ひろひこ  
**弘彦**

歌人、國學院大學名誉教授

● 贈賞理由

我々の夢も思想も、神話から発している。今も昔も「神話」に近づくには「歌」しかない。その「歌」の傑出した創造者としての業績に対して



【略 歴】

1924年 三重県生まれ

1948年 國學院大學国文科卒業 学生時代から釈迢空(折口信夫)

主宰の短歌結社「鳥船」に参加

私淑して折口家に同居し、歌人として創作活動を開始

1968年 第一歌集『冬の家族』で第十一回現代歌人協会賞

1973年 『滄浪歌』で第七回迢空賞

1979年 『海のまほろば』で第二十九回芸術選奨文部科学大臣賞

宮中歌会始の選者に就任(二〇〇八年まで)

1983年 宮内庁御用掛として皇族の歌の指導・相談役を務める

(二〇〇七年まで)

1988年 『天の鶴群』で第三十九回読売文学賞 紫綬褒章

1998年 日本藝術院賞 勲三等瑞宝章

2001年 『折口信夫伝 その思想と学問』で第十四回和辻哲郎文化賞

2007年 『バグダッド燃ゆ』で第二十二回詩歌文学館賞及び

第二十九回現代短歌大賞

2013年 『美しく愛しき日本』で第四回日本歌人クラブ大賞

文化功労者

(主な著書)

『冬の家族』『折口信夫の晩年』『滄浪歌』『海のまほろば』『天の鶴群』

『折口信夫伝 その思想と学問』『バグダッド燃ゆ』『美しく愛しき日本』

『岡野弘彦百首』など

# 岡野 弘彦

井上さんは一九〇七年のお生まれで、私は一九二四年の生まれ。井上さんが幼時のことを書かれた「あすなる物語」や「しろばんば」に心を引かれた。井上さんが、祖母と二人で伊豆で暮らした記憶を書いた随筆「蔵の家」の、小さくひっそりとした様子が好きだった。私も山の奥の一軒家の神主の家に生まれ育つて、妹や弟が育ってくるまでは、独りでひっそりと寂しかった。

井上さんと山本健吉さんと私が、東京都知事の招きで、硫黄島の戦死者の慰霊訪問に同行したことがあった。船で運ばれる前夜、一泊して体を整え、アメリカの船で硫黄島へ。井上さんは旧制高校時代は柔道の選手で、体を敏速に動かして調整していられた。いよいよ島の壕を案内される段になると、実にきびきびと身を動かして、要所を見て回られた。そういうときの井上さんの目の運びの鋭さが印象的だった。

更に後年、井上さんが宮中歌会始の儀に召歌を詠まれた。内容は、今は戦蹟となったモンゴルの風光を詠まれた歌だったが、歌会の日、前もって昭和天皇にその歌の地理的内容を説明される話をおそばで聞いていて、井上さんの地理的な把握と、その御説明の正確さに、感心させられたことが記憶に深く残っている。

敬愛する井上さんにゆかりの賞をいただくこと、まことに、光栄なことと感謝申し上げます。

## 時代と社会の語り部

デビュー作の『泥の河』（一九七七）から『流転の海』全9巻（一九八二～二〇一八）に至るまで、宮本輝は、常に戦後の社会に生きる庶民の姿と情感を描き尽くす、時代の語り部としての物語作家だった。

とりわけ、足掛け三十七年という長い時間を費やした大河小説『流転の海』は、彼の代表作であり、松坂熊吾とその妻の房江、そしてこの二人を父母とする息子の伸仁の三人家族を中心に、敗戦後の焼跡・闇市から朝鮮戦争、高度経済成長、日韓・日朝問題、モータリゼーション、ベトナム戦争、文化大革命などの「戦後」の国内外の社会的事象や激動の変化を背景としながら、戦後の日本人がどのように生き、死んでいったかを丸ごと提示しようという大胆で壮大な試みをはらんだ小説だった。

ここに私たちが通過してきた時代と空間に生きてきた人々のすべての肖像が集められている。成功者と失敗者、善男善女が登場するかと思えば、悪漢・悪党が跳梁跋扈する。社会には光と影があつて、はじめて立体的でリアルな作品空間が構築されるのだ。

そこに貫かれているのは、すべては有為転変し、流転してゆく変化そのものだ。思えば、宮本輝の小説は、大都市のなかを流れる〴〵泥の河から、時には激しく、時には穏やかな水の流れが、流転しながら大海へと注いでゆく〴〵水の変奏のような世界だった。もちろん、そこには燃え盛る火もあれば、猛烈な風も、豊かな緑の森も野もあった。宮本輝は、この作品を最初は自らの父をモデルとして書き始めたという。しかし、それは書き続けているうちに、個人や個的な家族の物語を超え、戦後（昭和後半）の日本社会そのものを全体的に描くことへと向かっていったのである。

しかし、この代表作として的大河小説も、作家・宮本輝にとって、一つの里程碑りていひょうでしかないだろう。偉大でありながら卑小な父親の死の後も、その子どもたちは、生き続けてゆかねばならない。平成、令和と揺れ動いてゆく時代と社会の庶民の姿を、作家がこれからも作品化してゆくことに疑いはないのである。

# 選 評 岡野 弘彦氏

辻原 登 (選考委員代表)

## 岡野弘彦氏の受賞に寄せて

日本文化＝日本語は、現代と古代に橋を渡す人を常に必要として来た。本居宣長や折口信夫がそうだ。そのような存在を今の時代に望むなら、岡野弘彦氏を措いていない。

日本語には何度も滅亡の危機があった。記紀万葉の時代がそうであったし、明治維新も、一九四五年の敗戦も、日本語が消えてもおかしくない状況だった。そして、今また四度目の危機に遭遇しているし、より深刻かもしれない。過去の危機を克服する砦となったのは、常に「歌」であった。

「記紀万葉」の時代の人々は、「歌」を後世に残すために、外国語である漢語から音訓併用の日本語を創設したのである。

近代で、「古代」に最も通じた心を持った人・折口信夫に全心全霊を挙げて師事した岡野氏は、「人間社会では古代に遡るほど言葉の力は大きい。言霊とは、言葉のかたちで発揮される魂の力、霊力です」と語る。その歌業には、「言霊の幸はふ国」(万葉八九四)のエッセンスが籠められている。

氏は関東大震災の翌年の生まれで、太平洋戦争で徴兵、学徒出陣を経験した。大正、昭和、平成、令和四代を生き抜き、一九八三年(昭和58)から二〇〇七年(平成19)まで皇室の和歌御用掛を務めた。その歌群と論述の質と量は他の追隨を許さない。一首だけ引く。

美しくかなしき日本。わが胸のほむら鎮めて 雪ふりしきる (『美しく愛しき日本』)

井上靖記念文化賞特別賞にこれほど適しい方はいない。

# 井上靖記念文化賞選考委員会

令和二年二月十五日

東京ドームホテル(東京都文京区)

選考委員

川村

湊

文芸評論家・法政大学名誉教授

栗原

小巻

女優・日本中国文化交流協会副会長

酒井

忠康

美術評論家・世田谷美術館館長

島倉

朝雄

北海道新聞社編集局文化部長

辻原

登

作家・県立神奈川近代文学館館長

(五十音順・敬称略)

